［特別企画２］

若年層へ発信　今，看護師だからできる広報

本田尚美，山本純子，野口友理子，喜多陽子，高乗裕子，浜崎裕美子，
中鋪成美，澤村　大，木内清孝，伊藤俊之，辻　肇
京都府赤十字血液センター

Participation of registered nurses in the promotion of blood donation in younger generations

Naomi Honda, Junko Yamamoto, Yuriko Noguchi, Yoko Kita, Yumiko Hamasaki,
Narumi Nakashiki, Dai Sawamura, Kiyotaka Kiuchi, Toshiyuki Ito, and Hajime Tsuji
Kyoto Red Cross Blood Center

抄　録

平成25年度から京都センターでは，採血副作用予防の説明や輸血を受けた患者・家族の声を生で届けられる看護師ならではの広報をめざして，看護師が献血セミナーに同行している。高校生以上を対象としたセミナーでは，献血の流れの説明，献血模擬体験，血液型判定体験などを実施した。また看護師の臨床体験を伝えたり，当日の供給状況を説明するなど，臨場感を持たせる工夫も加えた。小学生対象のセミナーでは，看護師が作成した紙芝居の上演，血液分離実験，献血模擬体験，看護師なりきり体験などを実施した。セミナー後のアンケート調査では，参加者の100％近くが献血の必要性を理解し，約80％が献血に参加してみたいと回答した。若年層には「まず献血を知ってもらう」ことが一番重要であり，看護師が参加することにより，献血をより身近に感じてもらえると期待できる。今後はさらに多くの看護師がセミナーを担当できるような体制を築き，広報活動に関わることは血液事業における看護師業務の一環であると位置付けられるように努めて行きたい。

Key words: 広報 public relations，献血者確保 donor recruitment，
少子高齢化 demographic crisis，看護師 registered nurse，
献血セミナー visiting lecture of blood donation

［はじめに］

少子高齢化に伴って，献血人口は減少しており[1]，この対策として若年層の献血率を向上させることが血液事業の重要な課題である[2]。このため，各地の血液センターでは若年層向けの出前講座や献血セミナーなどの広報活動が強化されているが[3)～5)]，それらの取り組みにおける看護師の関わりはまだ薄いように思われる。

京都センターにおいては，平成25年度から看護師が献血セミナーに随時同行している。この契機は，ある高校献血であった。朝食抜きや睡眠不足などのために不採血となる生徒が非常に多く，

VVRも多発していた。「看護師から事前に説明することで，この傾向を改善できないか」という思いから，同行するようになった。

当初の契機は不採血率の改善とVVR予防であったが，その後は対象が小学生低学年にも拡大している。現在では，採血器具を使った実演や模擬体験，輸血を受けた患者さんや家族の声の紹介など，看護師ならではの広報活動へと発展している。これまでの工夫を重ねてきた看護師の取り組みについて報告する。

［方　　法］

献血セミナーが開催される時は，およそ１カ月前に献血課の広報担当者から打診がある。可能な限り，看護師も同行できるよう勤務調整を行っている。先方との打ち合わせにおいて希望されるセミナーの趣旨を把握する。献血取り組みの事前説明会，道徳の授業の一環，医療系専門学校の学習課題など趣旨はさまざまである。その後，参加者の年齢層や会場の環境等を考慮して，それぞれに応じた資料や資材を作製・準備する。高校生以上を対象とする場合は，献血を身近に感じてもらえるように説明する。小学生が対象の場合は，ボランティア精神や献血について理解を深めてもらうようにしている。

高校生以上を対象としたセミナーは，なるべく参加者の中に入り込んで対話方式で進行するように心がけている。セミナー開始当初は献血の流れを中心に説明していたが，参加者の反応は薄く，無関心な印象であった。回を重ねるうちに，学生は血液の成分や身体のしくみに興味があることがわかってきた。そこで，現在ではやや専門的な説明も盛り込むようにしている。セミナー参加者は数人～約300人，時間は10分～２時間程度とさまざまである。少人数で時間に余裕があるときは，血液型判定の実演などをしている。また，オープン採血用のベッドと採血機器を持参して献血の模擬体験を行うこともある。

献血取り組み前の事前説明会として開催するセミナーでは，当日の献血の流れをイメージできるように説明して，副作用予防に重点をおいている。夜更かしせず，空腹を避けるなど具体的に話し，献血はボランティアなので無理をしないことも申し添えている。セミナー後には，献血について友人や家族に話すことや，SNSで率直な印象を同世代に発信するようお願いしている。

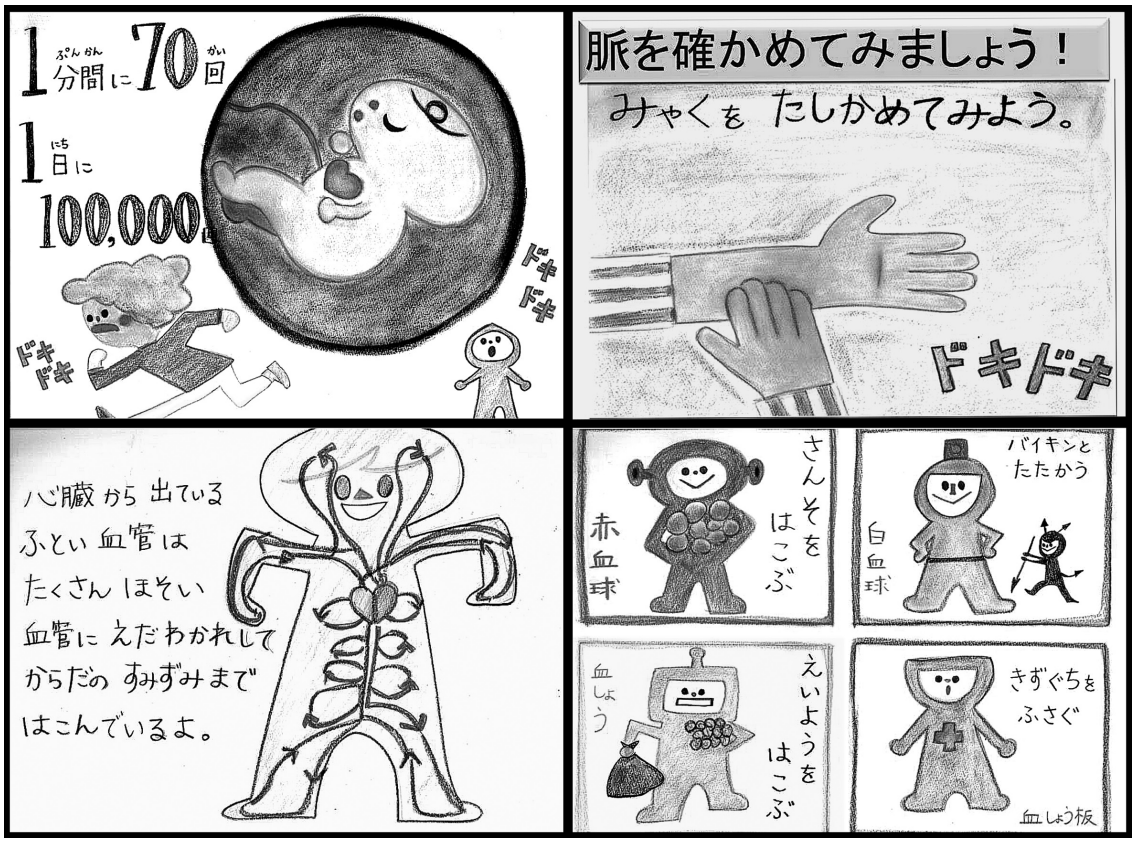
小学生対象のセミナーは，参加者が数人であっても数十人であっても，座学で話を聞くのは数分が限界であることを経験した。そこで，子供主体の参加型セミナーとなるよう心がけ，ほぼすべてのセミナーに看護師が同行している。子供達に，からだの中に血液が流れていることや血液成分の働きを，看護師で作成した紙芝居を使って説明している（**図１**）。時には血小板・赤血球・白血球・血漿のお面をつけて血液成分になってもらったり（**図２**），聴診器で心臓の音を聴きあって命を感じてもらうこともおこなっている。高学年の道徳の授業への参加時には，「ボランティア」や「人助け」について考えてもらい，その中に献血があることを説明している。

また夏休みに開く献血キッズセミナーでは，赤インクやジュースを使用しての分離実験や採血車での献血模擬体験を実施している。セミナーでの経験を活かして大手企業主催の「お仕事体験」イベントに参加した際には，女児にはナース服と子供たちで作成したナースキャップ・男児には救護服を着用してもらって，「なりきり体験」を実施した。献血者役の保護者からは「これを契機に献血に行く。」という声も一部ではあるが聞かれた。待ち時間には，献血にまつわる絵柄で缶バッジを作成し，服や鞄など身近な所に付けて広報していただくこともお願いした。

対象者が誰であっても，セミナーでは輸血用血液を待ち望んでいる患者さんや家族がいることを必ず話している。たとえば輸血後には元気が出て遊びに夢中になれる子供の話や，お母さんの体が楽になって子供を抱っこできる話など，血液は患者さんも周囲の人も幸せにするということを紹介している。小学生には，お母さんに抱っこしてもらえた話を「血液が親子の絆を繋ぐ」という手作りの紙芝居で伝えている。

［結　　果］

セミナーへの看護師の同行回数は，当初（平成



看護師の手作りで，体内を血液が流れていることや血液成分の働きを説明するために使用する。通常は13枚構成で，うち４場面を図示した。

図１　小学生対象のセミナーで使用する紙芝居

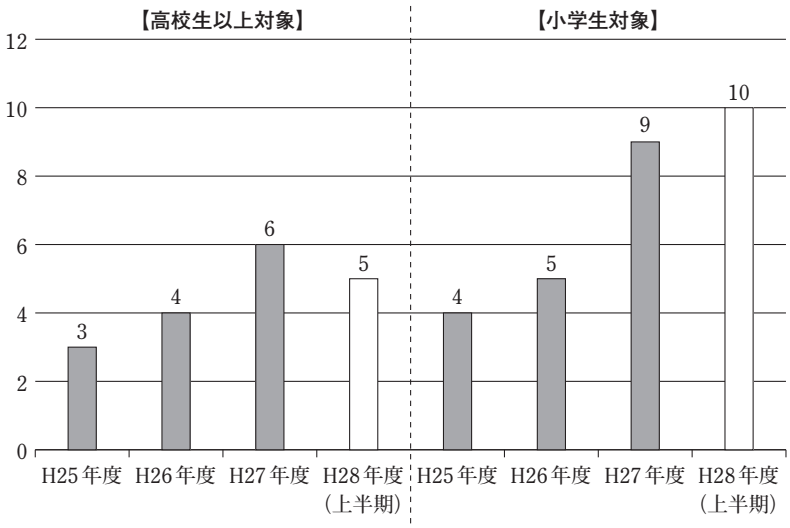
25年度）は７回（高校生以上対象３回，小学生対象４回）であったが，徐々に増加し，今年度上半期には高校生以上対象セミナーに５回，小学生対象セミナーに10回同行するまでに至っている（**図３**）。

セミナー後には全員にアンケート調査を依頼している。回答者600名中ほぼ全員の594名（99％）が献血の必要性を理解できたと回答し，478名（80％）が一度献血したいと回答してくれた。自由記述欄の回答では，高校生以上の参加者からは「ずっと献血に興味はあったので，聞けて良かった。」「このようなセミナーが開催されていることをもっと早く知りたかった。」などの感想が寄せられた。子供たちからは「今日，献血のことを聞いてその意味がわかりました。」「今，この瞬間も血液が必要な人がいるから，大人になったら献血に参加したいです。」というコメントをいただいた。このようなコメントが，私たちが献血セミナーを続ける原動力になっている。

献血セミナーを通じた啓発は直ちに結果が得られるものではないが，中には具体的成果を実感できる事例もあった。学校献血を実施しているある高校では，平成24年には不採血率が50％近くあった。朝食抜きや睡眠不足など献血に対する理解不足のため，その大半は医師問診での採血不適であった。セミナーを開催するようになってから，不採血率はほぼ半減しただけでなく，献血に参加する生徒数も増加している（**図４**）。これは，セ

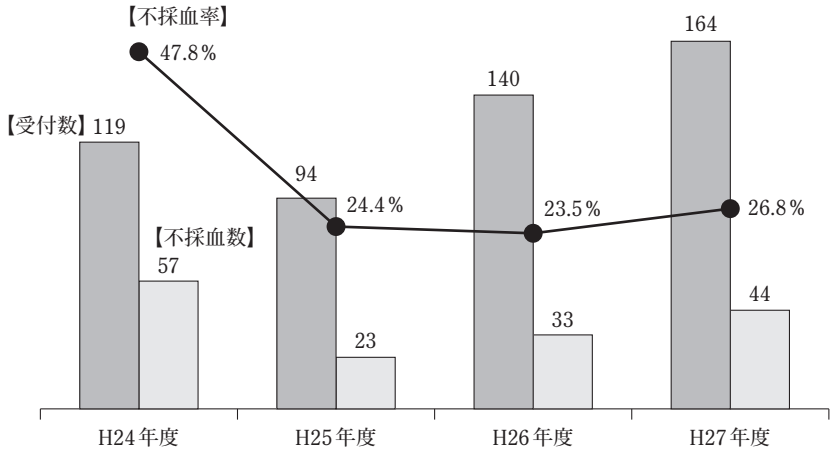
手作りの血小板・赤血球・白血球・血漿のお面をつけて血液成分になることで，血液の働きを理解する。

図２　小学生が血液成分のお面をつけた場面



平成25年度は７回(高校生以上対象３回，小学生対象４回)だったが，今年度上半期には高校生以上対象セミナーに５回，小学生対象セミナーに10回同行するまでに至った。

図３　看護師が献血セミナーに同行する回数の増加



平成24年に50％近くあった不採血率が，セミナーを開催するようになってから大きく低下し，献血に参加する生徒数も増加を示している。

図４　京都府下の某高校における不採血率の推移

ミナーを聴いた生徒が朝食や十分な睡眠の必要性を理解し，生徒自ら献血への十分な心構えと安心して参加できるようになったこと，セミナーを聴いた教職員も積極的に献血を呼びかけるようになったことなどが理由だと考えている。

［考　　察］

献血離れが進行している現在では，まず若年層に「献血を知ってもらう」ことが重要である。

血液センターの看護師は，輸血用血液を献血者から安全かつ円滑に採血することが求められている。さらに，看護師は患者さん･患者さんの家族･献血者の声を若年層に生で届けられる絶好のポジションにもいる。この立場を活かして看護師が広報活動に携わることを，血液事業における看護師業務の一環と位置付けられるような体制となるように，「カイゼン」にも努めて行きたいと考えている。

（本論文の要旨は，第40回日本血液事業学会にて発表した。）

引用文献

1）厚生労働省医薬・生活衛生局血液対策課，“第２章　献血推進2020”，平成27年度血液事業報告，pp.13-15，東京.

2）松坂俊光：少子高齢化に伴う献血血液の相対的不足に対する方策について．日輸血細胞治療会誌59：826-831，2013.

3）松坂俊光，高本功，兵頭和夫：献血啓発としての学校出前講座の実践とその意義．血液事業34：605-611，2012.

4）清水慎一：献血セミナーを実施した献血推進～これからの地域血液センターの在るべき姿について～．血液事業35：725-727，2013.

5）三輪宜伯ほか：若年層献血者確保のための高校献血及び献血セミナーの実施に向けた推進について（抄録）．血液事業38：489，2015.